

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：27401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520562

研究課題名(和文)古辞書における方言掲載意識に関する研究

研究課題名(英文)A study of the dialects in old dictionaries in Kyushu

研究代表者

米谷 隆史 (YONEYA, TAKASHI)

熊本県立大学・文学部・准教授

研究者番号：60273554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：『いろは字』や諫早文庫本節用集について知られていた通り、室町末から江戸初期に九州で書写・刊行された古辞書の付訓には、同地の方言が反映している例が存する。本研究において、当該期の辞書類を博搜して調査を行ったところ、文明13年薩摩版・享禄3年日向版『聚分韻略』伝本への加筆部分、元和3年以前書写『継忘集』、元和6年写『色葉集』にも、九州方言の特徴である才段長音のウ段長音化や、九州方言語彙の掲載が見られることが明らかとなった。この結果と他地域における事例を併せ考えると、当該期の辞書諸本において方言の反映が目立つのは、代表的な辞書とされる節用集ではなく、色葉集や和名集と呼ばれる辞書群であるといえる。

研究成果の概要(英文)：As previously reported, the dictionaries in Kyushu from the late Muromachi period to the early Edo period, such as Irohaji and Isahayabunnkobon-Setsuyoshu, reflected the regional dialect. This study revealed that other dictionaries, Shubuniryaku (1481)(1530), Keiboshu(early 17C) and Irohashu (1620), had the similar characteristics. The results means that that most of the dictionaries of the same age that reflected its local dialect are not Setuyoshu, which was major in those days, but Irohashu and Wamyoshu.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：色葉集 和名集 聚分韻略 節用集 キリシタン資料 九州方言

1. 研究開始当初の背景

近年、各地の典籍収蔵機関における web 上での画像公開の促進や、閲覧・撮影手続きの簡素化に伴い、古辞書をめぐる研究環境は大きな改善を見ている。その一方で、古辞書の日本語史研究資料としての利用は、成立前後の時期における語形や漢字表記の確認等にとどまることが多い状況は変わっておらず、古辞書研究と日本語史研究をつなぐためには、さらに多くの試みが必要な段階にある。

同時代の各種古辞書群が切り取っている言語の状況は一樣ではない。その要因としては専ら、古辞書全般に存する先書踏襲性の高さ、使用者・使用目的の違い、が指摘されるが、地域性の観点も忘れるわけにはゆかない。現存する辞書伝本がそれほど多くなく、かつ畿内成立のものに偏る室町前期までと、所謂「三都」における出版書としての辞書が専ら流布した江戸期との間にあって、室町後期から江戸初期（以下、「当該期」と略記）は、国内の比較的広範囲の地域で書写・刊行された辞書伝本が確認されている時期である。なかでも九州地域は、キリシタ資料の記述等から、（畿内を除く）他地域よりも同時代の言語状況を把握しやすい面を持つ。古辞書における地域性の反映を検討する試みの端緒として、当該期の九州を選択した所以である。

2. 研究の目的

古辞書の記載は各時代の文化の中央地における言語観や社会観の歴史を辿る際の材料とされることが多い。室町中頃までの古辞書に限って言えば、現存するものの多くは畿内周辺で編纂されていることから、それも当然の結果である。しかし、当該期においては、辞書そのもの、或いはある辞書の伝本の一つが、畿内以外の地域で編纂乃至は書写されている事例があり、それらの中には、地域性の反映が見られることも少なくない。本研究は、17世紀初頭に九州で書写された2本の古辞書 - 諫早文庫本『節用集』（近世初期写）及び、慶應義塾図書館蔵『色葉集（仮題）』（元和6年写） - を端緒に、九州で書写・刊行された辞書類の文献方言史資料としての定位を行った上で、類例の発掘を目指した。またそれらの調査結果をもとに、地域性反映の様相と当該期の人々の辞書観との関係性を明らかにしていくことを目的とした。

なお、辞書本文の分析と平行して実施する、古辞書を受容する文化圏に関する検討を通じて、新たな文献方言史資料の発掘もなされるであろうとの目論見もあった。

3. 研究の方法

(1) 当該期の古辞書に存する九州方言の反映事例の確認を進めた。地域性の根拠としたのは、主に、『日葡辞書』において九州方言であることを示す（「X(imo)」(シモ) 注記が付されて掲出されている語の存否（以下、「シモ語の掲出」と略記）と、ロドリゲス『日本

大文典』に九州地方一般の特徴として言及される才段長音（主に合音）のウ段長音化（以下、「ウ段長音化」と略記）である。調査対象とした古辞書は以下の通り（掲出は書写・刊行の時代順）。調査は、原本の書誌調査実施の上、多く複写画像によって行った。

薩摩版『聚分韻略』文明13年(1481)刊
a 国会図書館本 b 東洋文庫本
c 天理図書館本 d 国文学研究資料館本

日向版『聚分韻略』享禄3年(1530)刊
e 東洋文庫本 f 龍門文庫本
g 内閣文庫本(2本所蔵のうち、和19088)
h 京都大学谷村文庫本
i 宮崎県総合博物館本

・は無訓本の『聚分韻略』だが、使用者による加筆（加筆時期は異なる。概ね室町後期から江戸中期頃まで）に地域性が認められる。

『継忘集』元和3年(1617)以前写
元和3年に「金蔵院」の「快全」が入手した旨の識語を有する。書写地不明ながら、後筆の慶安元年(1648)の識語に、僧名「快意」が見られる。同時期、鹿児島県坊津一乗院（末寺に「金蔵院」を有する）に「快意」なる僧がいたことから、仮に同地付近での成立と推定した。

『色葉集』（仮題）元和6年(1620)写
現在の宮崎県高千穂で「安田与左衛門」が書写した旨の奥書を有する。同地の郷土層から延岡藩有馬家の家臣となった西氏に伝来したことが、「日向新小路住人ノ西喜内本也」等の書き込みから判明する。「西喜内」他の名は、有馬家の記録にも散見され、同地に西氏が居住していたことは、同時期の「新小路」地図に西氏の居宅が載ることからも証される。

(2) 古辞書及びその周辺の文献に関する調査と分析

古本節用集諸本の中で唯一、畿内以外の地域性を明確に認めることができる『諫早文庫本節用集』の所蔵先である諫早文庫において、関連典籍の閲覧調査を行った。また、同図書館以外においても、各種の文献を、地域性の反映の存否の観点から見なおす作業を随時に行った。

4. 研究成果

(1) 当該期古辞書に確認された地域性の概要を順に示す。

・九州版『聚分韻略』にみる地域性
シモ語の掲出例（符号は上記諸本に対応）
イゲ（蔴 トゲの意）a d e
ホコル（莽 ホドケル意）a e i
スタ（篠 齒朶の意）a
ナガシ（霖 梅雨の意）a c e
シロバイ（壘 石灰の意）b h

ウ段長音化例

ツクヌウ(傭) g / トドクウル(壅) i
ヲキヌウ(繕) c / フクルウ(鵬) d
f の龍門文庫本を除く、多くの伝本に地域性の反映が見られた。なお、字音の加筆は唐音(本来的にウ段長音で仮名付けされる字音が多い)との区別が難しいため、今回は調査対象外とした。今後の課題である。

『継忘集』にみる地域性

シモ語の掲出例

シラクサ(白宛 腫れ物の意)
エヒカニ(鰈 伊勢海老の意)
ガタ(渦 干潟の意)
モロムキ(常若 齒朶の意)

ウ段長音化例

チウシヨシヤウ(調所状)
ウ段長音化例はごく少なく、かつ他地域でも比較的よく見られる拗長音の例のみであった。ただし、「風」の字音を「ホウ」とする例が存することは、次項の『色葉集』にも共通しており注目される。さらに、現在は九州地方でのみ用いられる国字「杓(ハゼ)」「櫛」が見られるのは興味深い。

『色葉集』にみる地域性

シモ語の掲出例

アヲメ(青茹 野菜を茹でる意)
カイゴ(蚕)
ガタ(渦)
ハマフツ(濱蓬 河原蓬の意)
ビキン(鼻巾 鼻をかむ紙の意)他

ウ段長音化例

ウ、シウ(応鐘)
リクウ(利口)
ズウスイ(増水)
ツウリウ(逗留)
フユウ(不用) 他多数

他に魚扁に「各」を旁とする漢字を「ハタラク」と訓じ、「テキノ」(敵の)と注して掲出する例がある。これは、齋木一馬が西国の文書に特徴的な用字であることを指摘するものである。

の古辞書に地域性の反映が見られるとの指摘はこれまでなされたことがなく、また、に見られる多様な方言語彙の掲載や多数のウ段長音化例も、今回の調査で始めて全貌が明らかになったものである。

先行研究で言及されている古辞書の地域性の様相に、今回の調査結果を併せて考えてみよう。まず、当該期の古辞書で、のよう¹に方言語彙の掲出やオ段長音とウ段長音との動揺が言及されているものには、次のようなものが存する。()内は書写地域

・方言語彙の掲出のみ言及あり

亀井本『和名集』(福島)

諫早文庫本『節用集』(長崎・佐賀力)

『辞林枝葉』(古本節用集の一)(仙台力)

・ウ段・オ段長音の交替のみ言及あり

有坂本『和名集』(不明)

広島大学本『和名集』(不明)

米沢文庫本『倭玉篇』(東国力)

・双方の言及あり

『いろは字』写(千葉、但し宮崎出身者編)

元龜二年本『運歩色葉集』(東北力)

これに今回調査した古辞書を加えて考えると、当該期を代表する辞書とされ、写本だけでも 60 ほどの伝本を数えるイロハ意義分類体の節用集には、地域性の反映が見られることがさほど多くないことがわかる。一方で全国的に目立つのは、イロハ分類体の「色葉集」や意義分類体の「和名集」と総称される辞書群である。

ここで注目すべきは、先行研究において、これらの辞書群が節用集に比して文書・書簡用語を豊富に収録しているとされること、また、節用集が韻事に関わる辞書とされることである。すなわち、色葉集や和名集は節用集よりも、日常的な文書使用の場に近しい辞書であるために、節用集諸本よりも方言の反映が目立つ伝本が多いと解釈されるわけである。本研究の第一の成果は、文書・書簡用語の有無という観点から推測されていた当時の人々の辞書観のありようを、地域性の反映の有無という観点からも裏付けることができた点にある。

ちなみに、薩摩版と日向版の『聚分韻略』に見える九州方言の反映は、同書がまさに韻事に従う辞書であることから、色葉集や和名集と同一に考えるわけには行かない。しかし、夙に知られるとおり、薩南派の祖 文之玄昌の書写とする奥書(真偽は疑わしいとされるが、同書がこの学統で受容された典籍であることは間違いのないと思われる)を有する抄物『襟帯集』には、オ段長音とウ段長音との交替例が目立つとされる。『聚分韻略』の加筆に見られる地域性は、このような抄物に存する口語的側面に連なるものとみるべきであろう。

ともあれ、九州においては、雅・俗双方の古辞書に地域性の反映が確認されたこととなる。また、語彙や音韻の面だけでなく、「杓」(ハゼ)や、魚扁に「各」(ハタラク)のような国字使用の面にも反映が見られたことは注目される。畿内以外の地域で成立・書写された辞書にはなんらかの面で地域性が反映しているはず、という目を以て調査を進めるべきであることが、これらの結果から明確になったとも言えよう。

なお、『羅葡日辞書』や『日葡辞書』のようなキリシタンの辞書に見える方言語彙の掲出についても、それを特別な営為と見なさない解釈が成り立つことも明らかになった。すなわち、九州方言の反映と見られる事例が存した から のような辞書を所持、書写しうる知識と財力を有し、かつ、書記言語においても「シモ」の語と評価される語や音韻特

徴を保つような階層の人々が九州に一定数存在していたことは間違いない。『羅葡日辞書』や『日葡辞書』に見られる方言語彙の掲出は、両辞書の編纂作業を担った人々の中に、こうした階層の人々が含まれていたことを示すと考えられる。畿内の語を規範としつつ、若干の方言を交え掲出する（あるいは、掲出してしまふ）のは、当時の九州の古辞書によく見られた姿であって、編纂目的の特殊性と編纂意識の高さからこれらとは別格と見るべき『羅葡日辞書』や『日葡辞書』もその例外ではなかったといえよう。

以上の(1)の成果については、2度の学会発表で大部分を公開済みであり、現在、論文の作成中である。

(2)古辞書及びその周辺の文献に関する調査と分析

諫早文庫において、節用集に関係すると思われる江戸初期までの辞書諸本（『大広益会玉篇』『三作韻』等）の閲覧調査を実施したが、残念ながら、節用集との関係を示すような書入れ等を見つけることはできなかった。しかし、色葉集や和名集の受容に連なる、やや通俗的な文献に方言反映例が見られることが明らかになった。管見に入ったのは兵法書であるが、今後も継続して文献の博搜に努めたい。また、先行研究の指摘が存するところではあるが、諫早文庫本『平家物語』は零本ながら、折々にやや特殊な語形を見せるテキストである。才段長音とウ段長音の動揺が見られるテキストとして著名な平松家本『平家物語』を佐賀地域での写本とする説があることを踏まえると、辞書に限定せず、広い視点から文献方言史の資料を発掘していく作業が必要であろう。

東北地方の近世版本のなかに、方言の反映が見られることを確認しえたのは、今回の調査を進めて行く中で、上述のような視点を得ることができていたためである。このうち『農家手習状』（江戸後期刊）『小野篁歌字尽』（江戸中期以降刊力）については、すでに、東北方言に見られる語頭以外のカ・タ行音の有声化や母音イ・エの交替を示す例の存在を指摘した論文を発表した。これ以外にも東北の往来物や農書の版本には類例が確認されており、中には、刊行者の自筆文書が残る事例や、刊行に至ったいきさつを記す文書が残る事例も確認できた。こうした資料の分析から、各地域・各時代における方言と文字社会との関係を明らかにしていくことも可能であろう。

中世末から近世初期の九州地方を主な調査対象とした本研究は、江戸中期以降の東北地方を対象とする研究の萌芽ともなったわけである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕(計 1件)

米谷 隆史、往来物に見る方言反映事例について - 近世後期の東北地方における -、熊本県立大学文学部紀要、査読無、第 20 巻、2014、pp.73-86

〔学会発表〕(計 2件)

米谷 隆史、シモの古辞書に見える方言の反映をめぐって、日本語学会、2013年10月27日、静岡大学静岡キャンパス

米谷 隆史、古辞書に反映した地域性をめぐって「タウラウ」（蠶螂）の異称「アマキビ」を端緒に、西日本国語国文学会、2012年9月16日、宮崎市清武町文化会館

〔図書〕(該当無)

〔産業財産権〕

出願状況 (該当無)

取得状況 (該当無)

〔その他〕(該当無)

6. 研究組織

(1)研究代表者

米谷 隆史 (YONEYA, Takashi)

熊本県立大学・文学部・准教授

研究者番号：60273554

(2)研究分担者 (該当無)

(3)連携研究者 (該当無)